

「生き物のいのち」

千葉 泰淳

我が家の池に、今年もモリアオガエルが卵を産みつけました。直径20cmほどの真っ白な泡の塊から、何百匹ものオタマジャクシが生まれ落ちて行くのを見ていると、必死に生きようとする本能が強く感じられ、大きく息を吐いてしまいました。

そんなオタマジャクシたちですが、池に棲むイモリや周りに居る蛇たち天敵に襲われ、あるいは卵のうちから食べられ、何千匹という数のうち生き残るのはごくごくわずかです。

そこで家の者が、少しでも多く生き残るようにと、泡の真下に器を置いてオタマジャクシを受け止め、大きくなるまで世話をして池へ放したこともありました。

けれど、翌年につくる卵の数はいつもとかわりありませんでした。増えすぎても餌が無いからなのか、カエルになってからも天敵に襲われてしまったのか。淘汰されて、自然に適度な数に収まったということなののでしょうか。結局、人の手で何とかしよう、護ろうなんて考えるのは、自然から見たら「余計なお世話」でしかないのかなと思うところでした。

そんな命のやり取りをしているカエルもイモリも蛇も、私の趣味で立ち寄るペットショップへ行くと、隣り合ったケースに入れられて売られているんですね。いろんないのちが売り買いされているということが良いか悪いかということとは、自分には言う事は出来ません。けれど、周りに棲んでいる生き物たちも、飼っている生き物も同じいのちであり、大切に見守らなければと心がけているところでもあります。